

「ニューガラス」を探し続ける



㈱住田光学ガラス

沢登 成人

私がガラスの開発に従事してすでに40年、ニューガラスフォーラムも設立されてから30年以上になった。

本フォーラムのウェブサイトにもあるように、ニューガラスとは、「ガラスが本来持っている優れた性質を、これまでの観念を超えた精度に高め、高機能化したガラス」のことである。この定義に従えば、これまで私が携わった開発テーマのほとんどが、ニューガラスと呼ばれるものであろう。

光学ガラス製造メーカーの従業員として、本業の光学ガラスの開発は当然であるが、それ以外の機能性ガラスの開発にも力を注いできた。特に1990年代は、いわゆる光機能性ガラスの開発が盛んに行われていた時期で、我々もその流れの中で、新しいガラスの開発に取り組んできた。その頃は、自社の中だけで仕事をしていたという印象はあまりない。大学の先生方に、ご指導やご意見をいただいたり、他の企業の開発者の方々と、共同で仕事を進めたりということがほとんどであった。

ニューガラスフォーラムのセミナーや若手懇談会などに参加し、他の会社の研究開発者の方々から多くの刺激を受けた。その頃に交流のあった方たちと、たまにお会いする機会があると、当時の気持ちが思い出され、とても懐かしくなる。

私のもともとの開発テーマは、光に関するガラス材料が中心であったが、他分野の業界の開発関係者からの、こんなガラスがあったらいい、という要望を追求したり、あるいは

自分たちの興味を引くテーマに没頭したりで、いろいろな分野のガラス材料に手を出した。少しでも面白いものを作り出そうと意識的に心がけてきたせいで、変わったガラスもいろいろ創ってきたように思う。

幸運にも、この時期に開発したいいくつかのガラスは、新製品として市場に出すことができた。また、それを少しでも必要として使ってくださる方々がいるという事は、幸いなことである。

私たちの研究開発の進め方は、まず技術的興味から始まる。儲かるかどうか判断できないガラスであっても、途中で中止することはなく、ある程度の完成度まで継続するのが基本である。研究開発に対して、担当者の自由度が高く、長期にわたって一つのテーマに取り組めるような雰囲気、環境を会社全体が作っていて、手前味噌だが、大企業にも負けていない会社だと思っている。

2000年を過ぎると、私の仕事は、開発だけでなく事業全般に関係することが増え、それまでとは違う分野の経験となった。少しは視野も広がったように思う。仕事領域を広げてくれる良い機会を与えられたと思っている。

その後、経営的な仕事も加わり、セミナーなど参加する機会が減った時期もあったが、ここ数年はまた、ニューガラスフォーラムの会議などに参加する機会が増えてきた。

最近の技術的な興味は、これまで開発してきた変わった材料を、少量でも低コストで届けられるような、効率の良い製造方法を実現することである。欲しいと思ってくださる方々にきちんと届けたいと、思い悩んでいる。

2020年からは、ニューガラスフォーラム理事という重要な役目を仰せつかった。昨年来の、新型コロナウイルスの影響下という環境もあり、実際に他の理事の方々と顔を合わせることもできず、ご挨拶も十分にできていない。そのような状況下でも、今後の研究活動の在り方、ガラス開発の方向などの議論がなされている。このことは、ガラスには材料あるいは素材としてこれまで以上に多くの役割があり、それらをニューガラスフォーラムがメッセージとして発信している。ニューガラスの研究開発に携わってきた者として、その仕事の一部に関わることができて大変嬉しく思っている。未知のテーマや、興味深いテーマはまだたくさんある。若い人たちに、夢のようなテーマに果敢にチャレンジしてもらいたいと思う。誰も見たこともない、想像もしていないニューガラスの登場に期待したい。